

ええと、またまた追加です。

このごろよく、こういうことを聞かれます。

「注文もないのに、どうして次々と書くんですか」

たしかに、ふつうのひとには、それが不思議らしい。

けれども、そういうひとは、作家の本質がわかっていない。

注文をするひとは、編集者か出版社だとおもいこんでいる。

それは先入観にすぎません。

じつは注文をするひとは（ひとといえない場合もあるが）そういうひとではなく、例えばこの作品の場合は、おばけなのです。

おばけが夜な夜な枕元にやってきて、

「おれのことは、いつ書いてくれるんだい」

とか、

「わたしのことを、どうしてまだ書いてくれないの」

とか、注文がうるさいのです。

それで次々と書くしかないのです。

それでは始めます。

+ 1 1 【ねむりひめ】

日曜の昼下がりに、お使いで躑躅峠（つつじとうげ）にさしかかったところ、木陰に寝ている女のひとを見かけました。

白い服をきたきれいなひとで、木の根っこを枕に、上を向いて静かに寝ています。

黄色い蝶がふたつ、その人の周りを飛んでいて、何と云ったらいのか、とても美しい光景でした。

まるで絵本で見た白雪姫でした。

将来お嫁さんをもらうなら、こういうひとがいいなとふとおもわれました。

すすすすすす

やややややや

すすすすすす
やややややや

しばらくみとれていましたが、そのうち、眠っているのか死んでいるのかわからなくなったので、警官か医者か先生をよぼうとかんがえたものの、けっきょく懐爺のところに行きました。

ぼくにとって懐爺は、警官であり医者であり先生であるのですから。

「夢でも見たのでしょうか、金ちゃん」

懐爺は、寝ぼけ声でした。

「ひるまにゆめなんかみるもんか」

「ですから白昼夢（はくちゅうむ）」

「たしかに、はくちょうみたいなひとだったのう」

「まあ、いいでしょう。わたしは昼寝中です」

懐爺は祠の奥に引っ込もうとしました。

「ひるねはよるにしるや。わしはあのひとが、きになってしかたないんじゃ」

「それはおぼけだから気になるのです」

「あのひとがおぼけかい。あんなきれいなおぼけがいるもんかい」

「そんなきれいなひとが村にいるわけもないでしょう」

懐爺は眠そうな眼をしていました。

「なるほどのう」

ぼくは懐爺の説に納得する他はありません。

「それは【ねむりひめ】ですね」

「ねむっているおひめさまで【ねむりひめ】かい。あいかわらずいいかげんじゃのう」

懐爺の眠気をさますために、わざとそういいました。

「相変わらずとは失礼ですね」

懐爺は眼をこすりながら苦笑しました。

「しつれいなのは、あいかわらずじゃのうて、いいかげんのほうじゃろが」

「そうでしたそうでした」

いいながら懐爺はまた奥に引っ込もうとします。

「ちゃんとはなしてからねむれや」

懐爺に睡眠が必要とはおもわれませんでした。

「そうでしたそうでした」

「そうじゃそうじゃ」

「ところで、何の話でしたっけ」

懐爺はとぼけました。

「あほかい。【ねむりひめ】じゃ」

ぼくはっこみしました。

「そうでしたそうでした」

「そうじゃそうじゃ。わしをたぶらかしてなんとする」

ぼくはいよいよ怒ったふりをしました。

それで懐爺はようやくその気になってくれました。

「【ねむりひめ】は眼をさますことはありません。かっこいい王子様が声をかけたって起きません。でも、あまりの美しさに我慢できずに【ねむりひめ】にちょっとでも触れると、からだ腐（くさ）ります」

「わしもさわりたいくなっただのう」

「触らないでよかったですね。きわめて美しい花には棘（とげ）も毒もあります」

腐るのはいやです。

「からだのどこがくさるんじゃ」

「それは人それぞれですが、鼻が腐って落ちる人もいれば耳が腐って落ちる人もいます」

懐爺は鼻や耳が落ちる仕種（しぐさ）をしました。

それはそれはおぼけなんかよりも、ずっとずっとおそろしかったものです。

「ならば、ちんちんがくさっておちるひともおるんか」

「さすがは金ちゃん。わたしはあえていいませんでした、そこはまず最初に腐って落ちます」

「それはありがたいのう。わしはいちど、おんなになってみたかったのじゃ」

もっとも、乞食女ではなく白雪姫がいい。

「あのね金ちゃん。落ちて、また生えてくるはずがないのですよ」

「なんじゃ、でないのかい。とかげとちがうのかい」

「でません。たしかに人間も、蜥蜴（とかげ）みたいならいいですよ
え」

「かみさまにもまちがいはあるんじやのう」

「神様はまちがいだらけなのですよ。けれどもおぼけはまちがいはお
かしません。でるときにちゃんとでる」

懐爺は自信満々の声でいいました。

ぼくが黙っていると、懐爺はしめしめという顔で祠の奥に消えて行
きました。

懐爺はああいうけれども、ぼくはどうしても【ねむりひめ】はおぼ
けではなく、人間なのだとおもわれてなりません。

懐爺はああいうけれども、【ねむりひめ】にちょっとだけさわって
みてみる。くたかへなりません。

帰りに躑躅峠のあの場所に寄ってみると、女のひとはもういませ
んでした。

黄色い蝶がふたつ、舞っているだけでした。

その後ぼくは、あんな美しい女のひとにであったことはありません。

でももしかすると眠っていたから美しいのであって、あのひとが
起きだしてべらんこべらんこ喋くり散らかしたら、いくら美しくとも
美しくおもわないかもしれせん。